

「エルサレム入城」

マルコの福音書 11:1~11

はじめに

前回は、目の見えない物乞いバルティマイのその目を、イエシュアが見えるようにされたという出来事でした。今日の内容は、イエシュアがロバの子に乗ってエルサレムに入られる、イエシュアの「エルサレム入城」と呼ばれる出来事です。前回と今回のこの二つの出来事は、場所や内容について大きく異なるため、一見つながりや関連性が見受けられませんが、ヘブル語の視点で捉えるならば、それが見えてきます。今日の登場人物、いや登場動物である「子ロバ」、ヘブル語でアイル(אֵיל)というこの言葉は、「目を開ける、覆いを取り払う」という意味のウール(וּל)を語源とする言葉です。つまり見えなかったバルティマイの目をウール、開かれたイエシュアは、アイル、子ロバに乗られる、というつながりが見られるのです。それはすなわちイエシュアは見えぬ者の目を開ける御方である、ということが二重に強調されているということです。具体的にはイエシュアを神の御子メシアとして認めない、そのような御方として受け入れることができない、見ることができない、まさに見えぬ、いわゆる霊的盲目の状態にあるイスラエルの民、ユダヤ人たちのその目を、やがてイエシュアが開いてくださり、彼らがこの真実を受け入れるようになるという神のご計画が、この一見異なる二つの出来事の中に、あたかも繰り返して強調するかのよう「型」たとえとして表されているのです。そしてそれはいつ起こるのか、どのようにして成就するのかということが今日の内容には表されています。

もちろん記されている状況としては、イエシュアが弟子たちに予告されたとおり、いよいよ十字架にかかる、そのためにエルサレムに入られるという、神のご計画においても非常に重要な場面です。しかしイエシュアの十字架の死、そして復活は、確かに重要不可欠なものではありますが、それは一通過点であり、御父である神の目的も御子イエシュアのそれも、イエシュアの十字架の死と復活がその最終目的ではなく、イエシュアご自身がこの地上に建てられる御国、千年王国、メシア王国とも呼ばれる「神の国」の王、王の王、主の主となられることこそがそれなのです。そしてそれはまた前回バルティマイが叫んだように、イエシュアが「ダビデの子」すなわち旧約聖書に預言された、イスラエルのとこしえの王となられることでもあり、神はこの事実を今日の内容の中にも指し示しておられるのです。このように、見える状況ではなく、秘められ、隠されているものに、まさに見えぬものにこそ目を留めるようにして聖書を読む、学ぶことは重要であると信じます。ですから今日もそのような視点をもってご一緒に読み進んでまいりましょう。願わくは聖霊の助けがありますように。

1. ベタニア

マルコの福音書【新改訳 2017】

11:1 さて、一行がエルサレムに近づき、オリーブ山のふもとのベテパゲとベタニアに来たとき、イエスはこう言って二人の弟子を遣わされた。

イエシュアとその一行は「[ベテパゲとベタニアに来た](#)」とあります。この地名はどちらも「いちじくの家」という意味になります。今の日本では馴染みの薄い果物ですが、イスラエルでは昔も今も最も馴染み

のあるポピュラーで一般的な果物、それが「いちじく」です。そんな「いちじく」について、ヘブル語には二つの呼び名があります。一つは小さくて甘みの少ない、あるいはまだ青い未熟ないちじくを指すパグ(פֶּגֶה)、そしてもう一つは逆に大きくて甘い、熟したいちじく、テエナー(תְּאֵנָה)です。つまりベテパゲは「パグの家(בֵּית פֶּגֶה)」、そしてベタニアは「テエナーの家(בֵּית תְּאֵנָה)」という意味だということです。このいちじくが聖書で最初に登場するのは創世記 3:7 で、そこはエデンの園です。様々な果樹が植えられたであろうエデンの園で唯一その名が明記されているのがこの「いちじく」テエナーなのです。つまりこのテエナーはエデンの園を代表、象徴する果物と言えます。イエシュアはこの名を持ったベタニアから「**二人の弟子を遣わされ**」ました。ここに使われている「遣わす」という意味のシャーラハ(שָׁלַח)は本来「手を伸ばす、追い出す」と訳される言葉で、イエシュアのここでの言動は以下の出来事を指し示すものと考えられます。

創世記【新改訳 2017】

3:6 そこで、女が見ると、その木は食べるのに良さそうで、目に慕わしく、またその木は賢くしてくれそうであましかった。それで、女はその実を取って食べ、ともにいた夫にも与えたので、夫も食べた。

3:7 こうして、**ふたり**の目は開かれ、自分たちが裸であることを知った。そこで彼らは、**いちじく**の葉をつづり合わせて、自分たちのために腰の覆いを作った。

3:22 神である【主】はこう言われた。「見よ。人はわれわれのうちのひとりのようになり、善悪を知るようになった。今、人がその**手を伸ばして**、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きることがないようにしよう。」

3:23 神である【主】は、人をエデンの園から**追い出し**、人が自分が取り出された大地を耕すようにされた。

これは人が神に対して犯した最初の罪を記した箇所です。この出来事によってすべての人は罪ある者となり、また死ぬ者となりました。神のご計画はこの問題を解決することすなわち人の罪を贖い、人を永遠に生きる者、再びエデンの園に住まわせる者へと回復させることにあり、そのためにイエシュアはご自分が遣わされたのだということをここに表しておられると考えられます。ちなみに今日の内容はイエシュアがこのベタニアから始めて、エルサレムに入り、またベタニアに戻って来られるというものです。この事実からもイエシュアの、神のご計画がエデンの園への回帰、回復にあることが指し示されていると考えられます。

2. 子ロバ

マルコの福音書【新改訳 2017】

11:2 「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない子ろばが、つながれているのに気がつくでしょう。それをほどいて、引いて来なさい。」

11:3 もしだれかが、『なぜそんなことをするのか』と言ったら、『主がお入り用なのです。すぐに、またここにお返しします』と言いなさい。」

イエシュアが「子ろば」を用いられた理由について、以下の預言の成就であると言えます。

ゼカリヤ書【新改訳 2017】

9:8 わたしは、わたしの家のために、行き来する者の見張りとして衛所に立つ。もはや、虐げる者はそこを通らない。今わたしがこの目で見ているからだ。

9:9 娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。見よ、あなたの王があなたのところに来る。義なる者で、勝利を得、柔和な者で、**ろばに乗って。雌ろばの子である、ろばに乗って。**

9:10 わたしは戦車をエフライムから、軍馬をエルサレムから絶えさせる。戦いの弓も絶たれる。彼は諸国の民に平和を告げ、その支配は海から海へ、大河から地の果てに至る。

イエシュアはご自分がここに預言された「あなたの王」イスラエルの王であることを示して「子ろば」を用いられたのです。エデンの園の象徴、「型」としてのベタニアから、このゼカリヤの預言の成就として「子ろば」に乗って出ていかれたイエシュアの姿に、エデンの園の回復と、イエシュアがイスラエルの王としてエルサレムに来られることが密接に結びついており、それらが同じ意味を持つ出来事であることが表されていると考えられます。つまり「エデンの園＝エルサレム」**エデンの園の回復とはすなわち、エルサレムの回復、これを中心とするイスラエル王国の再建のことである**、という事実がここには表されていると考えられるのです。

今日、国家としてのイスラエルは確かに存在しています。しかし聖書はこれを神のご計画の成就、完成としてのイスラエルとは認めていません。それが次の「主がお入り用なのです」という御言葉には表されているのです。ここに「必要、入り用」という意味のツォレフ(צורף)という言葉が使われており、これは旧約聖書で一度しか使われていない言葉ですが、それは以下の記述です。

Ⅱ 歴代誌【新改訳 2017】

2:12 またヒラムは言った。「天と地を造られたイスラエルの神、【主】がほめたたえられますように。主はダビデ王に知恵のある子を与え、思慮と悟りを授けて、【主】のための宮と、自分の王国のための宮殿を建てさせられます。

2:16 私たちのほうでは、お入り用なだけレバノンから木材を切り…あなたのもとにお届けします。あなたがこれをエルサレムに運び上げてください。」

これはヒラムというツロの王が、当時エルサレムに神殿を建てようとしていたダビデの子ソロモンに語ったものです。ヒラムはレバノン杉と呼ばれる上等な杉の木を、「【主】のための宮」神殿のための建材として惜しげもなく「お入り用なだけ」提供したことが記されており、ここにツォレフがあります。ですからこの言葉には、**エルサレムに神殿を建てること**が指し示されていると考えられます。現在のイスラエル、エルサレムにそれはありません。それどころかかつて神殿があった場所には、イスラム教の寺院が建ち、ユダヤ人たちはそこへ足を踏み入れることさえできないのです。聖書が指し示す、イエシュアが「主がお入り用」としておられるイスラエル、エルサレムとはまだなっていないのです。それはもちろん人の手によってではなく、ただイエシュアご自身の御手によってこれがなされるためであり、そのためにイエシュアは必ず再びこの地上に、エルサレムに来られるのです。しかし建物としての神殿が建てばそれで良いわけではありません。神殿よりもさらに重要な事実が次に指し示されています。

3. 乗る

マルコの福音書【新改訳 2017】

11:4 弟子たちは出かけて行き、表通りにある家の戸口に、子ろばがつながれているのを見つけたので、それをほどいた。

11:5 すると、そこに立っていた何人かが言った。「子ろばをほどいたりして、どうするのか。」

11:6 弟子たちが、イエスの言われたとおりに話すと、彼らは許してくれた。

11:7 それで、子ろばをイエスのところに引いて行き、自分たちの上着をその上に掛けた。イエスはそれに乗られた。

イエシュアは子ロバに「乗られた」とあります。ここに使われているのはヤーシャヴ(יָשַׁב)と言い、本来は「住む、とどまる」という意味の言葉です。つまりイエシュアが子ロバ、すなわち霊的盲目の状態から癒された、見えるようになったイスラエルの民、彼らとともにヤーシャヴ「住む」ようになることこそが重要、必要「主がお入り用」なことなのです。エデンの回復、イスラエルの回復とは土地や環境のことだけを指しているではありません。それよりもむしろ大事なものは「神と人の交わり、関係の回復」です。神と人がともに住み、ともに生きる、これこそが神の求めておられる、神のご計画の完成なのです。その姿は一組の男女が結ばれ、結婚し、一つの家族となることに表されています。この時弟子たちは子ロバの上に「自分たちの上着」を掛けたことが記されていますが、この「上着、衣装」を意味するベゲド(בְּגָדִים)は本来、結婚の証として花嫁に贈られる服、つまり花嫁衣裳、ウェディングドレスを指す言葉なのです(創世記 24:53)。ですから神と人の交わり、関係の回復とは、一般的なイメージでの王とその民、主人としもべ、師と弟子のようなものではなく、それはまるで花婿と花嫁、若い夫婦、新婚カップルのような関係であると考えられ、神は人をそのような存在としてくださるご計画を持っておられるということです。

4. 仮庵の祭り

マルコの福音書【新改訳 2017】

11:8 すると、多くの人たちが自分たちの上着を道に敷き、ほかの人たちは葉の付いた枝を野から切って来て敷いた。

11:9 そして、前を行く人たちも、後に続く人たちも叫んだ。「ホサナ。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。」

11:10 祝福あれ、われらの父ダビデの、来たるべき国に。ホサナ、いと高き所に。」

11:11 こうしてイエスはエルサレムに着き、宮に入られた。そして、すべてを見て回った後、すでに夕方になっていたので、十二人と一緒にベタニアに出て行かれた。

エルサレムに来られたイエシュアを、人々は「自分たちの上着を道に敷き、ほかの人たちは葉の付いた枝を野から切って来て敷いた」とあり、このような形で迎えました。これはレビ記 23:40 に記されたイスラエルの秋の祭り、仮庵の祭りを表す行為であると考えられます。

レビ記【新改訳 2017】

23:34 「イスラエルの子らに告げよ。この第七の月の十五日には、七日間にわたる【主】の仮庵の祭りが始まる。

23:40 最初の日に、あなたがたは自分たちのために、美しい木の実、なつめ椰子の葉と茂った木の太枝、また川辺の柳を取り、七日間、あなたがたの神、【主】の前で喜び楽しむ。

23:41 年に七日間、【主】の祭りとしてこれを祝う。これはあなたがたが代々守るべき永遠の掟であり、第七の月に祝わなければならない。

しかしイエシュアが子ロバに乗ってエルサレムに来られたこの時期の季節は、秋ではなく春で、仮庵の祭りではなく、春の祭りである過ぎ越しの祭りを間近に控えていた時でした。日本的に言うならば、人々は元旦なのに浴衣を着て盆踊りをしたようなもので、つまり彼らはとんでもなく季節外れな方法でイエシュアを迎えたということなのです。ユダヤ人にとっての祭りの規定は私たちの文化、風習などよりももっと重く厳粛で、律法に則った、間違いなどあってはならないものでした。彼らの一見誤ったこの行為は一体何を表すのでしょうか。これが聖書に記されている以上、ただの間違い、ただの失敗などではありません。これはイエシュアが本当の意味でエルサレムに来られる、その時を表したものだと考えられます。つまり「型」やたとえなどではなく、神のご計画の成就、完成としての「神の国」をお建てになるために、イエシュアご自身が地上に再臨されるその日、その時です。それはすなわち春の過ぎ越しの祭りの前ではなく、秋の仮庵の祭りの前だということです。このように、エルサレムの人々のこの行為は、神のご計画の時を表す、大いなる間違い、聖なる勘違いであったと言えます。この事実は、人の正しい考え、正しい行いが神のご計画を成し遂げるのではなく、むしろ人が間違い、罪を犯すからこそ救いの御業が必要であり、人の愚かさ、足りなさ、弱さの中にこそ神の御業は表されるのだという真実を表した、その典型だと言えます。ともかく、神は聖書の記述の中に、出来事の中に、イエシュアがいつどのようにして来られるのかということを表しておられるのです。

5. ホサナ

マルコの福音書【新改訳 2017】

11:9 そして、前を行く人たちも、後に続く人たちも叫んだ。「ホサナ。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。

11:10 祝福あれ、われらの父ダビデの、来たるべき国に。ホサナ、いと高き所に。」

11:11 こうしてイエスはエルサレムに着き、宮に入られた。そして、すべてを見て回った後、すでに夕方になっていたので、十二人と一緒にベタニアに出て行かれた。

そして人々はイエシュアに向かって「ホサナ」(אֲנִי־יְהוֹשֻׁעַ)と叫びました。実はこの言動もまた秋の仮庵の祭りの中でなされるものなのです。そしてこれは詩篇 118:25 からの御言葉の引用です。

詩篇【新改訳 2017】

118:22 家を建てる者たちが捨てた石それが要の石となった。

118:23 これは【主】がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ。

118:24 これは【主】が設けられた日。この日を楽しみ喜ぼう。

118:25 ああ【主】よ、どうか救ってください。ああ【主】よ、どうか栄えさせてください。

118:26 祝福あれ【主】の御名によって来られる方に。私たちは【主】の家からあなたがたを祝福する。

118:27 【主】こそ神。主は私たちに光を与えられた。枝をもって祭りの行列を組め。祭壇の角のところまで。

この詩篇は、主が「家を建てる」ということを歌ったものです。この家とはもちろん神である主の住まわれる家であり、神殿、そして「神の国」を表しており、その中で「どうか救ってください」と訳されているのがこの「ホサナ」(נָסִינָה)という言葉なのです。この言葉は「救う」という意味のヤーシャ(יָשָׁא)と、「嘆願、勧め」を表すナー(נָא)という言葉が組み合わさったものです。神である主が「家を建てる」ということこそが私たちの願い求めている、嘆願している救いの現れだと歌っているのです。人々はイエシュア、まさに「救う」という意味の名を持つこの御方に向かってこの詩篇を歌い、イエシュアこそがイスラエルの主なる神であり、そして「神の国」を建てるという救いを成し遂げてくださる御方であると宣言しているのです。もちろん彼らがこの真の意味を理解して信じて歌っていないことは、この後にイエシュアを十字架にかけてしまうという事実からそれは明らかです。

そして「神の国」とは「ダビデの、来たるべき国」すなわちイスラエル王国の回復であり、「イエスは…宮に入られた」とあるようにイエシュアがエルサレムの神殿に来られるということなのです。イエシュアがやがてこの地上に再臨されるその時にそれは成就するのであり、ここに記された出来事はすべてその「型」です。そして最後にイエシュアは再び「十二人と一緒にベタニアに出て行かれた」とあります。先に述べたようにここでのベタニアはエデンの園を指し示しており、「十二」の部族からなるイスラエルの民とともにイエシュアはエデンの園を回復される、という神のご計画がイスラエルの回復と結びつけられて、ここに表されていると考えられます。決して日が暮れたのでうちに帰った、というようなただの状況説明などではないのです。ちなみに私たちの感覚とは違い、ユダヤ人は「夕方」を新しい一日の始まりとして見ます。神は今の世という一日を終わらせ、新しい日、新しい時代をもたらされます。それは今日という日が必ず終わり、次の日となっていくように、必ずその日は来るのです。確かにイエシュアは来られるのです。これを見ないで信じる者、つまり見る前に信じる者、そして見るまで信じ続ける者は幸いです。聖霊の助けがありますように。